

京都女子大学図書館吉澤文庫所蔵『相伝秘要蜜勘抄』翻刻

中 前 正 志
柴 田 清 子

京都女子大学図書館吉澤文庫に所蔵される『相伝秘要蜜勘抄』(YK911.232/K)は、江戸前期頃写の袋綴一冊(寛永以前 始め?)と鉛筆書きした紙片挿入。料紙は楮紙。縦二七・八×横二二・三cmの渋引表紙の左上に、「相伝秘要蜜勘抄 離別初恋四」(打付書)。前遊紙一丁、後遊紙二丁(うち一丁は後表紙見返し紙の剥がれたもの)で、前後表紙とそれら前後遊紙以外、全四十八丁。每半丁に八十一行。墨付第二丁表の右上端に蔵書印「日野庫」(陽刻朱長方印、縦五・八×横一・九cm)が存する。そして、同じ墨付第二丁表の冒頭に、右上の一部には右蔵書印が上から重ねて捺されているが、「古今和謡集卷第八 相伝秘要蜜勘抄／離別哥」とあり、以下、各巻冒頭に同様の形で、

古今和謡集卷第九	相伝秘要蜜勘抄／羈旅哥	(5才 5～6行目)
古今和謡集卷第十	相伝秘要蜜勘抄／物の名哥	(13ウ 4～5行目)
古今和謡集卷第十一	相伝秘要蜜勘抄／恋哥一	(17ウ 7～8行目)
古今和歌集卷第十二	相伝秘要蜜勘抄／恋哥二	(32ウ 5～6行目)
古今和歌集卷第十三	相伝秘要蜜勘抄／恋哥三	(36ウ 6～7行目)

古今和謠集卷第十四 相伝秘要蜜勘抄／恋哥四

(43才 1～2行目)

と見える。先引外題箇所にも「離別到恋四」とあったように、巻八離別から巻十四恋四までのみの零本である。本来は数冊から成っていたのであろう。全歌注ではなく、施注対象の古今集歌を、基本的には一つ書きの形で全部または一部掲げたうえで、注釈本文を掲載する。中に三箇所、「当道の説には……」(16ウ～17オ)「当家は……」(34才)「当流には……」(47ウ)という記事を含む。奥書類は見えない。なお、先引外題が「相伝秘要蜜勘抄」とするのに対して、右に列挙したところはいずれも「相伝秘要蜜勘抄」とするので、本伝本の書名としては、後者の方をとるべきなのだろう。

本書『相伝秘要蜜勘抄』を最初に取り上げたのは、片桐洋一氏「京都女子大学本相伝秘要蜜勘抄」と『東山御文庫本古今集聞書』一付、『中院本古今序抄』再説——(『中世古今集注釈書解題』五、赤尾照文堂、昭和六十一年一月)である。「大雑把に言えば、『毘沙門堂本古今集注』に類する注釈書」で、『初雁文庫本古今和歌集注』『毘沙門堂本古今集注』と興趣の説を、さらにくわしく、さらにサーピス精神をこめてに述べているところに特色があると思うのである」『「毘沙門堂本古今集注」の類と興趣の傾向を持ちながらも、完全に一致するわけでは必ずしもなく、いわゆる独自性をも持っている」などと説かれている。その片桐論考の直後の青木賜鶴子氏・生澤喜美恵氏・鳥井千佳子氏「古今和歌集灌頂口伝(下)——解題・本文・注釈——」(『女子大文学』国文篇37、昭和六十一年三月)は、『古今和歌集灌頂口伝』に注釈を施すなかで、「京都女子大学本『相伝秘要蜜勘抄』は、『毘沙門堂本注』と同種のものであるが、『清和天皇貞観十八年に御出家あり。水尾に籠玉ておこなひ給ひしかば、陽成位に付て代を納メ行玉フ』とし、『船にのれ』について『其御代に成りてつきたてまつりて世を渡れと云』と、これら(『冷泉家流伊勢物語抄』等……引用者注)と同様の説をあげながらも、すぐ後では本書と共通の『日も暮ぬと云は、清和のかくれ給ふと云』という説を述べている。(中略)次の『白き鳥のはしと足と赤き』についても、『冷泉家流伊勢物語抄』と密接な関わりがある。(中略)『足赤し』を『紅

梅のさしぬき』とする点は異なるが、それ以外はほとんど同一といつてよい。この点『毘沙門堂本注』は、『紅精ト云テ赤ハカマメシタルナリ』とし、前述した京都女子大学本『相伝秘要蜜勘抄』も『紅精の御袴をめすを云』としていて、より近い」(96頁)と、『相伝秘要蜜勘抄』の第十丁裏および第十一丁表の本文(片桐論考に引載されてもいる)を参照している。片桐論考以後に同書本文を参照した論考として、最も早いものであるう。その後、斯道文庫書誌叢刊之七『古今集注釈書伝本書目』(勉誠出版、平成十九年二月)が、『毘沙門堂本古今集注』『京都女子大本』として本書を著録するとともに、続いて「毘沙門堂本古今集注『京都女子大本』・古今和歌灌頂巻」として宮内庁書陵部所蔵安政元年鷹司政通書写本を挙げ、「京都女子大学蔵『古今和詞集相傳秘要蜜勘抄』(YK911.232/K、毘沙門堂古今集注)に同じ」と注した。そして最近には、舟見一哉氏『毘沙門堂本古今集注』系古注の伝本整理」(平成二十七年六月二十日中古文学会関西西部会第四十回例会)が、『毘沙門堂本古今集注』と同種とされる注釈書の伝本を整理し、毘沙門堂旧蔵本(現在国文学研究資料館蔵)を再定位する」(『中古文学会関西西部会会報』14、平成二十八年三月)なかで、本書についても右の書陵部蔵鷹司本などと共に位置付け、毘沙門堂旧蔵本との影響関係が想定し難いことなどを指摘している。

以上のような従来の研究内容に対して何らかの新たな知見を加えることは、門外漢の稿者らのよくするところではない。よって、本拙稿においては翻刻のみに専心することとした。

なお、本拙稿は、文学研究科国文学専攻博士前期課程の平成二十四年度授業「中世文学演習ⅡA」において、中前と受講生の柴田が『相伝秘要蜜勘抄』の翻刻作業を行ったのに基づいている。国文学研究資料館にマイクロフィルムが所蔵されていて(マイクロ請求記号242-64-3)全文がすでに広く公開されている状況下にあつて、翻刻を公刊する意味がどれほどあるのかと躊躇された面もあるが、授業での作業の一つの報告として大学院紀要に掲載させて頂くこととした次第である。授業での検討を基に柴田が翻刻本文の礎稿を作成して中前と協議点検、前文は中前が執筆して柴田が確

認した。その他、種々協議して成稿した。判読できていない箇所以外にも誤読や不備が少なくないのでと危惧される
ところであって、後日の補訂を期したい。大方のご批正をお願いする次第である。

【凡例】

- ・ 基本的には通行の字体に改めるとともに、私に句読点などを施した。
- ・ 判読し得なかった箇所は□とし、判読に際して確信を持てなかった文字については（？）と傍記した。また、誤写等の疑われる箇所には（ママ）と傍記したが、より具体的な注記を（ ）内に加えた場合もある。
- ・ 見せ消ちは元の本文も示したが、塗抹して訂正してある場合などは、そのことを特に断わることなく訂正された本文のみ載せた。
- ・ 随所に見える「朱云」「朱云」「朱言」（片桐論考参照）はゴシック体で示した。
- ・ 掲出された各古今集歌あるいはその一部の上に、『新編国歌大観』に基づいて、その歌の番号を掲げた。また、歌自体は全く掲出されないが、同歌についての記事が見られる場合は、その記事の上方に括弧に入れて歌番号を掲げた。
- ・ 掲出歌に関する記事が、掲出箇所の前後でなく、そこから離れた位置に存する場合、その記事の冒頭に歌番号を（ ）に入れて傍記した。
- ・ 半丁毎の末尾に「（1オ）などと記すとともに、それら以外の各行末には／を置いた。
- ・ 見やすさを考慮して、一つ書きの「一」の下に一字分の空白を設け、和歌を掲げることの多い「一」以下の一行はそのまま一行として、次行以下の記事は「一」から二字下げた形で追込みにして、それぞれ載せた。

古今和謠集卷第八 相伝秘要蜜勘抄／

離別哥 題しらす 在原行平朝臣哥也。／

一 立わかれいなはの山の嶺におふる松ときかはいまかへりこむ／

ゆきひら因幡守にて下とて、我か妻室の許へ送る也。／長谷雄中納言かむすめ、四条後の腹也。／

一 すかる鳴秋の萩原朝たちて旅行人をいつとかまたむ／

（マ）しかるは、しかの事也。春されはすかる鳴野の哥は、蜂卜云也。二家待かむすめの哥也。本云、すかるは鹿の異名也。／

一 かきりなく雲井のよそにわかるとも人を心にをくらさんやは」(一オ)

小野のちふるとは小野の好古か子、小野篁と云者の孫也。／たちねは母也。（たちねの親のまもりとあひそふる心はかりはせきなど）めぞ、たちわかれなは恋しかるへし、ちふるかうた／

一 かへる山有とはきけとはるかすみニ／

此哥は、藤原の宗行か哥也。業平とある本もあるへし。／

一 おしむから恋しき物を白雲のたちなん後はなに心ちせん／

人の駄のはなむけにと云は、藤原の敏行かゑちせんへ／くたりける時、紀貫之かよみたりし也。貫之か伯母

掣也。／

一 おもへとも身をしわけねは哥は、伊香胡か哥のあつゆきは忠／仁公の隨身也。のちには哥に依て宇多院ニつかふまつる也。」(一ウ)一 から衣立日はきかし朝露のをきてし行はけぬへき物ヲ／

中務卿常好の親王御むすめ哥也。ある人つかさ給ふと云は、／枇杷の左大臣仲平の御事なりと云也。／

一 あさなけに見へき君としたのまねはおもひたちぬる草枕也／

- 紀のむねさたは、貫之か舍弟也。人の家と云は、貫之か遠江／にすみし時につくりたる家なり。えそしらぬ
よし心みに／とよめる也。女は、貫之か娘也、助内侍也。姪に忍通し也。／
- 一 えそしらぬいま心見よいのちあらは我心^(マ)わする、人やとはぬと」(2オ)
- 一 別てふことは色にもあらなくに心にしみてわひしかるらむ／
- 一 人をわかれけるとは、平の蘆名^(マ)かむすめ忍てかよひけるか、／此女おほえのみつよしか妻に成り、遠江へ
下りける二つかはす。／
- 一 しら雲のこなたかなたに立わかれ心をぬさとくたく旅哉／
- (380) 379 良嶺のひておる哥也。みちのくへまかりける人によりて／つかはす^(しけるの歌か)そのは、寛平三年七月廿日^(マ)紀有実か下
る也。／
- 一 かへる山なにそはありであるかひはきてもとまらぬ名^(マ)こそ有けれ／
- 382 藤原の宗行か哥也。平兼輔となるもあり。みつねと」(2ウ) あるもあり。業平とあるもあり。とにかくに
宗行か哥也。／
- 385 もろともに鳴てと、めよ蜚秋のわかれはおしくやはあらぬ／
- 一 藤原の兼輔^(マ)か哥。于時從五位右衛門佐之後參議たり／延喜十七年四位成。利基か三男。六十二首入る也。／
- 386 秋きりの友に立出て別れなははれぬ思ひに恋やわたらん／
- 一 平のもとのりか哥也。三河守中興か一男也。／
- 388 人やりのみちならなくにおほかたはいきこしといひていさかゑりなん／
- 一 此哥源のさねか哥也。于時右近衛少將從五位上」(3オ) 信の守。参儀^(マ)左衛門督舒二男。昌泰三年^(マ)薨ス。／

- 387 一のちたに心になふ物ならはなにかわかれのかなしからまし／
- 391 しろめか哥。此人は江口の女也。ならひなき美女也。さかの御思人也。／
- 一 君か行こしの白山しらねとも雪のまに／あとはたつねん／
作者藤原のかねすけ。雪のまに／はすむ也。（任の讀か） 万云、／みよしの、花のまに／尋ぬれは思かけさる
嶺のしら雲／上中下の故三吉野と云也。／
- 393 一 わかれせは山（ママ）の桜にまかせてむとめんとめしは花のまに／（3ウ）
幽仙法しか哥也。此人は天台の座主也。慈覚御弟子也。／右近将監宗道か一男也。贈太政大臣繼陰の孫也。／
- 394 一 山風に桜ふきまきみたれなむ花のまきれに立とまるへく／
遍昭か哥。大原の花の許にてよめる哥也。／
- 396 一 あかすしてわかる、涙たきにそふ水まざるとやしもは見るらむ／
兼芸は幽仙の弟子也。伊勢守藤原古キか子也。哥四首入。（ママ）／
- 400 一 あかすしてわかる、袖の白玉を君か形見と褻てそゆく／
かきりなく思ふ涙にそほちぬる袖はかわかしあわん日までに」（4才）
- 402 一 あかすしての哥は、業平宇佐の勅使ニくたりし時、二条／后にみて給る哥也。かきくらしの哥は、菅原の淳
茂／よみて、助内侍につかはすかへし。男なる故ニよりて也。又、／ぬれ衣の事は、かきくらしことはふら
なむ春雨ぬれ／きぬきせて君をと、めん 是は松浦上人の御時よりおこる事也。／娘かうたなり。万云、
ぬきするその名はかりのぬれ衣は／
ななきわかれのなみたなりけり
- 403 一 しゐて行人をと、めん桜花いづれを道とまふまでなれ（ママ）／

404

一 伊勢かむすめ、中務か歌也。父はあつよしの親王なり。」(4ウ)
 一 むすふ手のしづくに濁る山の井のあかても人にわかれぬる哉／

405

一 しかの山こえの石井をむすふとてよむ。つらゆき／
 一 下のおひのみちはかた／＼わかつとも行めぐりてもあはぬとそおもふ／
 一 みちにあへる車に物をいひ次て、文をまいらせたる時、とものり。／

古今和詞集卷第九 相伝秘要蜜勘抄／

406

一 天の原ふりさけみれはかすかなるみかさの山に出し月かも／

ふりさけは、ふりあをいてみる心也。此哥は、むかし仲丸」(5オ) もろこしに物ならわしにつかはされたる時に、あまた／年をへて、えかゑりまうてこさりけるを、この国より／又、つかひまかりいたりけるに、たくひてまうてきなん／とていたりけるに、公いしうといふ所のうみへにて、／かの国の人、むまのはなむけしける。夜に成りて、月の／いとおもしろくさし出たりけるを見てよめるとなん／かたりつたふる也。かの仲丸は、光仁天皇の御時、学文也。／

407

一 わたの原やそしまかけて漕出ぬと人にはつけよ海人の釣船」(5ウ)

おきの国になかされける時に、舟にのりていてたるとて、／京なる人のもとにつかわしける。此哥、小野篁か哥也。／此人は、嵯峨天皇の御時、大内大極殿無悪善とそ／書たりける落書よみたるによりて、無題な^(ママ)かき／れし也。文選云、仁義礼智信の五常は世人の行所也。／非之悪謂へり。是を以て、さかなくていよし^(ママ)とよむ。落／書はよむ所科ありとて、なかされ給ふ。其後、なりひらか／奏聞依て、めしかへされし也。

或義には、姫宮をおかしたる」(6才) 科になかさるともいへり。七月はかり也。／

一 都いて、けふみかの原いつみ川かわ風さむみ衣かせやま／

一 ほのくとかあしの浦の朝きりに嶋かくれ行舟おしそ思ふ／

神亀二年九月十日^ニ伊勢大神宮へ御幸をなさる、／事ありしに、聖武あそはされし哥也。ほのく^ノの哥は、
／おもては旅の哥、是は風の哥也。天武天皇東宮ノ／太子高市王子十九才にて卒行ありき也。ほのく^ノとい
ふ^ニ四の義あり。風・若・寿・明、天地、此四の義は、今の哥は寿^ヲ」(6ウ) ほのく^ノといへり。明石の
浦は、娑婆のあきらかなるを云也。／朝きりは、死して冥途^ニ途を云也。嶋かくれは、此秋津し／まをかく
れて行を云。又、魔におかされ行ともあるへきか。船／は国王也。太公望の^{マイコト}主政を賢^{カシク}して悉直^ク、恵波流^ル
外^カ／千万^ニ壽^ニ、貴賤渡^レ世事能妙也、故号^ス二船^ト筏^ト誰不敬。／貞觀政要云、君者如^シ船。臣者如^レ水。水能渡^ス船^ヲ
還^{マツ}／船右在^テ臣船乗船覆同水の徳也。／

一 から衣きつ、馴にし妻しあればはるくきぬる^{タト}旅をしそ思ふ」(7才)

あつまのかたへ、友とする人ひとりふたりいさなひていきけり。／みかわの国やつはしといふ所にいたれり
けるに、その河の／ほとりに、かきつはたいとおもしろくさけりけるを見て、／木のかけにおりゐて、かき
つはたと云いつもしを句の／かしらにすへて、旅の心をよむ也。在原業平朝臣の／哥也。朱云、あつまのか
たといふは、まことにくたるにはあらず。／忠仁公のひかし山の家にあつけらる、をいふ也。友す／る人と
も、なりひらの子なり。友たりしは、有常・定文、」(7ウ) 同心して后をはぬすみたりとて、おなしくあ
つけらる、也。／三河と云也、実にわたる川にはあらず。三水なり。水をた／とへて為^レ心。仏法には、真
如の法水と云也。非^レ伝^ニには、／煩惱の三毒と云。水は、器^ニ随ひかなふ物なり。されは、／形をあらはす也。

名にしおは、いさことはむ都鳥我思ふ人^{あり}やなしやと／

けられし／かは、かく云也。此句、おりの本也。／
それ^をを植て見る。それを形見と云なり。おり居^マ（8ウ）てとは云、業平雲の上^ニ侍しか、忠仁公の許^ニあつ

心は、ものによりて変する故^ニたとへて云、心を水と云。苦也。三心の苦を三河といふなり。／二条后・
染殿后・四条后、此三人に別る、を歎く心を云也。／八橋と云は、八人を思ひ渡るを云也。其しないかん。
三条町・」（8オ）伊勢・小野小町・有常かむすめ・初草の女中将か妹・／定文むすめ・染殿后内侍・順子
五条ノ后也。此八人也。かきつ／はたは、人の形見^マよみならはせりける物なれば也。そのうへ前／裁に杜若
のありけるなり。後撰集<sup>色いひそのしづめの宿の杜若れ
色かわるこそかたみ成けれ</sup>／貞助か哥。此哥の心は、むかし、天武天皇御子新田／親王、女恋て
あひて後にかよひ給わぬ心なりしに、女／うらみあまりてしかは、是を形見^ニせよとて杜若を／やりければ、
それを植て見る。それを形見と云なり。おり居^マ（8ウ）てとは云、業平雲の上^ニ侍しか、忠仁公の許^ニあつ
けられし／かは、かく云也。此句、おりの本也。／
むさしの国としもつふさの国とのあわむにある川をは、す／みた川と云也。かの河のほとりにいたりて、宮
このいと恋／しうおほえければ、しはし川のほとり^ニおり居て思ひやれば、／かきりなくとをくも来^マしける
かなと思ひわひて詠／をるに、わたしもり、はや舟^ニのれ日も暮ぬといひ」（9オ）ければ、舟にのりてわた
らんとするに、みな人、物わ／ひしくて、京におもふ人なくしもあらず。さるおりに、／しろき鳥のはしと
あしとあかきか、河のほとりに／きゐてあそひけり。京にはみえぬ鳥なりければ、／みな人みしらす。渡し
守に、是は何鳥そととひけ／れは、これなむ都鳥といひけるをき、て、さても／都鳥とはとて、此哥をよむ
也。朱云、角田川は勿論、む／さし・しもふさの国の中をなかる、川也。長良郷^マ」（9ウ）于時武蔵守、国
経卿于時下^マ経守也。津国吹田川の南／北^ニ二人の家あり。武蔵・下総と云也。すひ田川をすみ／田川と云。
いとみとの五音のひ、き通したる故也。ほとりに／居たるとは、かの人の家に行て遊ぶを云也。かきりなく

／かきりなくとをく来し^(マ)ければ、きさきたちの中の／とをき恋路を云也。渡守とは関白也。王は舟にたとへたれば、／関白を渡守と云也。其時の関白は昭宣公也。巨政^(マ)伝云、／三公之侍臣は護^テ君位^ヲ不^レ失、如下渡守倫引^ヲ船^ヲ不^レ失。」(10オ) 清和天皇、貞観十八年^ニ御出家あり、水尾に籠玉て／おこなひ給ひしかは、陽成位^ニ付て代を納^テ行玉。此時^ニ昭宣公、業平をよひて、清和こそ勸勘ありつれ、など／陽成はいか、おほしめし捨給はんとして、其御代に成りて／つきたてまつりて世を渡れと云。渡し守、是也。舟と云／へり。日も暮ぬと云は、清和かくれ給ふと云。みな人物さび／しくと云は、中将来て陽成^ニむかひたてまつりてか／こまる事、わひしくかたはらいたきを云也。京^ニおもふ人」(10ウ) なきにしもあらずとは、二条の後、下男にてなかされたりしか、／御子陽成御門を云也。鳥とは王を云。王は、政一天にかけりて／万人をめくむ故に、鳥と云。文集^ニ云、鳥君ノ政^ハ翼^ヲ翔^ス四^ニ海^ニ云。しろきと云は、王^ハ銀盧^ヲなをしをめす故也。鶯／あかしとは、御臂のあかきを云也。紅精の御袴をめすを／あしの赤と云也。伊勢物語にはしきの大なる鳥と謂へり。／漢高祖司^キ宜公ト云、かほ八寸ありし如か。陽成天／皇も面の八寸ましますしかは、司^シ宜の大きさと云也。」(11オ) 司^キ宜公と云は、軍^ニかちて百官のつかさをよろしく^(マ)す故か。／司^キ宜公と書て、つかさよろしとよむ也。京にはみえぬ鳥と／云也、業平の京にありしには、王土にはみえずと云へり。みな／人々の見しらすとは、定文、有常等も始めてみたて／まつるなるへし。わたし守に問ふとは、今位に着給ふかと／いふ也。委敷は物語に注するのみ。／

一 きたへ行雁ぞ鳴なるつれてこし数はたらてそかへるへらなる／

此哥は、ある人、おとこ女もろとも^ニ人のくにへまかりける、」(11ウ) おとこまかりいたりて、すなはち身まかりにければ、女ひとり／京へかへりけるみちに、帰るかりの鳴けるをき、てよめる。／朱云、伊春^(マ)の甲

413 一 斐守にてくたる時、清原房則かむすめを／具して行たりしかは、茲春国にて死してんけり。妻ひ／とりか京へすこゝとのほととてよむ也。茲春かま、舅／有常か代官にくたりける也。房は^(ママ)大伴の良房か子也。／

山かくす春の霞そうらめしきいづれ都のさかひ成らん／
此哥は、紀よしもちあつまへくたる。仲文かむすめをつれて」(12才)くたりてのほととて、三河国にてしはし逗留するなり。／その時、京へまうてくるとて、関山のわたりにてよめり。／まことには、壬生よしなりか女也。／

414 一 きえはつる時しなけれは越路なる白山のなは雪にそ有ける／

みつねかゑちせんへ国のつかさ給りてまかりける時よむ。／

417 一 ゆふつくよおほつかなきを玉匣ふたみのうらはあけてこそみめ／

かねすけ、但馬のくにの湯へまかりける時ふたみの／うらと云所にとまりて、ゆふさりのかれいひたうへけるに、」(12才)友に有ける人々の哥よみける時よむ也。／

418 一 かり暮したなはたつめにやとからんあまの河原に我はきにけり／

これたかのみこのともにかりにまかりける時に、あまの川と／云所に河のほとりにゐて、酒などのみけるつゐてに、／在原なりひら川原にかりしたる心をよむ。／

419 一 ひととせにひとたひきます君までは宿かす人もあらしと思ふ／

みこは、此哥を返しよみつ、かへしえせすなりにければ、／ともに侍りて紀ありつねかつかまつるなり。此人は、紀の」(13才)名虎か一男。承和元年恭す。／

421 一 たむけにはつゝりの袖もきるへきにもみちにあける神やかへらん^(ママ)／

たむけと云は、法しのけさなり。是は助内侍か哥也。／

古今和謠集卷第十 相伝秘要蜜勘抄／

物の名哥 ふちはらのとしゆきの朝臣／

一心から花のしづくにそほちつ、うくひすとのみ鳥の鳴らむ／

くへきほとときすきぬれや待わひて哥、助内侍也。／

浪のうつせみれは玉そみたれけるひろは、袖にはかなからむや（13ウ）

あり原の重春か哥也。壬生忠峯、返しせし也。／

たもとよりはなれて玉そつ、まめや是なんそれとうつせみんかし／

あなうめにつねなるへくもみえぬ哉恋しかるへきかはにほひつ、／

此哥は、ゑんきの御むすめ深子の親王御哥也。うめ。^(?)／

かつけとも浪のなかにさくられて風吹ことにうきしつむ玉／

つらゆき、仙洞へまいりて、かはさくらをつかまつれとて。／

みよし野、吉野の瀧にうかひ出るあわをかたまのきゆる／

とみつらん 在原是としの朝臣よめり。をかたまの木。」（14オ）

秋はきぬ今やまかきのきりくす夜なくなかん風のさむさに／

やまかきの木を、七条中宮御哥也。／

ちりぬれはのちはあくたになる花を思ひしらすもまとふてふ哉／

くたにをへんせうよむ。くたに、葉のまろくとしてちいさく／て、深山などに苔のうへなどにはへる草也。

世には流布／せず、たえ苔と云也。／

440 一 秋ちかう野は成りにける白露のをける草葉も色かわりつ、／
(マ)

き、やうの花の事、仙洞にてどものりつかまつる哥也。」(14ウ)

一 うは玉の夢になにかわなくさまんうつ、にたにもあかぬ心を／

川な草。ふかやふか哥也。雲林院にてよむ也。／

450 一 花の色はたゝひとさかりこけれどもかへす／そ露は染ける／

さかりこけ。たかむこのとしはるは、めされてよませたる。／あをみとりのやうなる草也。又、こけの類也。

大嘗会に／いる物なり。塩衣と云て、ほやとよめり。／
(セ)

456 一 波の音のけさからことにきこゆるは春のしらへやあしたまるらん／
(マ)

一 かにあたる波のしつくを春なれはいかゝさきちる花と見さらん」(15オ)

此哥ともは、安倍清行か備中へくたりてのほるとて、備前／の牛まると云濱のわたりに、からことのはまと

いふ／所あり。よみて京にて兼覧親王の許へまいりて、此／よし申てければ、又、いかなりける名所かと問

せ給へは、／いかゝささと云所もありしと申せは、しはし案し給ひ／て、やかてあそはす。いかゝさきなり。／

454 一 いさゝめに時まつまにそひはへぬる心はせをは人にみえつ、／

さゝ、まつ、ひは、はせをは也。紀めのとよめり。いさゝめは、いさゝかなり。」(15ウ)

464 一 花ことにあかすちらしし風なれはいくそはくわる／
(マ)

はくはからとよめり。しけあきらの親王の御哥也。／

441 一 ふりはへていさ古郷の花みんとこしをにほひそうつろひにけり／
(マ)

1094 443 442 460 (445)

貫之か家人、笠家光か哥也。追て申すなり。／いさ、めに時まつとは、いさ、めとはかりそめなるを云。又、いさ、／みとも云也。朱云、から琴と云所は伊賀国にもあるよし／申侍なり。かの所に夜ことに琴を人の引けんは、あやしみ／てみるほとに、うつくしき女のから琴をひきけるか、人の」(16才) 近付を見て、水の中へ入てうせぬ。水神也。琴をとり／おとし残して帰る。奴〔帰る奴〕は帰るぬか神とあかめ琴引の山と云。なはり／の郡にあり。物の名に、をかたまの木の名と見ゆ。され／ともく近代に人しらす。内裏にもふかき秘事にめさる、也。／谷ふかみたつをかたまの木吾なれば思ふ心の朽てやみぬる／もし是はいふかしく、さ衣にあり。口伝、これにあり。／

一 めとにけつりて花させりける 簪マと云、物の名の草の形也。／

朱云、めとにおほくの義ありと云へりけれ共、当道の説」(16ウ) には、めんとを二字中を略してめと、云也。其めんとは何／者ぞ。不審。口伝に申へし。百和香464と云は、かくはしきくさ／の花にてあわせたる香なり。或はゆりなり。又はたき物也。／川名草、池などに青緑のことくにあり。／

一 うは玉のわかくろかみやかはるらん鏡のかけにふれる白雪／かみや川。名所、伊勢国にあり。貫之まいりてよむ。／

一 我やとのなふみちらす鳥うたん野はなければやこ、にしもくる／りうたんの花を中納言朝忠よみし也。りんたう也。」(17才)

一 ありと見て頼むそかたきうつせみの世をはなしと思ひなしてん／おはなを在原の元方よめり。／

一 めさしぬらすなと云は、めさしは目をさしきりてとるわらは／

へをめさしと云也。竹河の哥に、／

一 たけかはの橋のつめなるやはなそのにわれをはわれく／

めさしおほく^(ママ)てト云。めのわらはへト云モ有ぬへし。／

古今和謠集卷第十一 相伝秘要蜜勘抄／

恋哥一 題しらす よみ人しらす^(ママ) (17ウ)

一 郭公鳴やさ月のあやめ草あやめもしらす恋もする哉／

あやめもしらぬは、恋すれはこゝろほれくとしてあやの／めもしらぬ也。又、きぬの名などの事也。されは、夕暮^ニ／物の見えぬをはあやめもわかぬなどふるき物に書たる也。／史記云、旅宿^(ママ)はみちをおほつかなく行と云へり。されは／おほつかなき也。しやうふをあやめといふなり。天竺の詞也。／朱云、心に似るへき哥よみも是をしらぬ也。ことにく／ならはてはしるへからず。むかし、天竺に女ありけり。聖^{セイ} (18オ) 太王申す人あり。その人の思人あり。菖蒲冠をしたり／けり。うはなりのきさきをねたみて、思ひ死にうせたりける。／くちなわとなれり。そのくちなわ、あやめと云大蛇になる。／しかれとも、なかさ三尺にあまらず。毒蛇にてちいさければ、／友の大蛇や、もすれはのみて腹をさしぬかれて破り／出れは、おほくの大蛇ころされおわんぬ。その、ちは、大蛇とも／心をあわせてかれに食をあたへさりしかは、うへてふし／まろひもひれふしかなしむ。その、ち、かの聖太王に付て (18ウ) 御悩をなす。はかせうらなひ出して、さらは食を得させよ／とて、飯を海へ入させらるれば、それをも蛇ともとりくらい／て、今のあやめ蛇にあたへす。猶きさきに付て物くるはしく／くちはしり給へは、その時飯をちまきに拵て海へ／入られしかは、余の蛇はくたんのあやめかとおもひ、ちまき／をくらはされは、是を心やすくあやめは食する也。それ／より

475

一

世中はかくこそ有けれ吹風のめにみぬ人も恋しかりける／＼
 此哥、延喜第七宮深子内親王を貫之うけ給り及て／恋たてまつる也。内裏に七条の宮とは、此人の事也。／

472

一

しら波の跡なきかたに行舟も風そたよりのしるへなりける／
 此哥は、山階の右大将藤原経行の娘を恋て、藤原／＼の勝臣かつかはす哥也。返しあり。しら波のあとなき恋
 と／聞からに見ゆるなるへきかたはゆるさし」(20ウ)

471

一

吉野川いは浪たかく行水のはやくそ人を思ひそめてし／
 よし野川はことにはやき川なれは、はやき事をよそへて／よむなり。心は、貫之、仙洞に周防の内侍とて美人有、／御所^書所給り、はしめ洞庭^{てい}まてまいるに御盃給るとて、」(20オ) 此女をいたされたり。やかて続て送る。吉野川あな^ヒなち^ニ／かきるましきなり。よの川もいくらははやき川はあるへし。／しかれとも、いもせ山の中をなかる、水なれや、^ヒはやくも落／あへかしと、いもせの中よりなかるれはとなり。／
 下第一の美人なり。／延喜のおもひ人也。わりなくも守平思ひ給ふ也。／
 哥は、橘の長盛かむすめヲ／恋て、延喜第六の御子守平親王のあそはされたり／とするす。此むすめは、天
 ちまきははしまりたり。わか朝の菖蒲草を／あやめと云事は、此蛇を表したる也。此蛇人に付て祟る」(19オ)
 を、靈魂のまつることにて、五月五日はいわふなり。しかれは、／恋するものはみな蛇ほととの事にこそならずとも、終に／はくちなわに成る也。郭公鳴や五月とは、た、五月といはん／ためなれは、郭公^三子細なし。
 あやめもしらぬといはん為也。／恋する人、をのれか身の蛇になる事をいはず、た、／こひをするかなと云心也。あやめもしらすとは、かゝるおそ／ろしき毒蛇にさへ成る人もあり。あまりに恋をせは、我も／人もあやめ程の蛇にや成らんと云心也。此理たやすくしりかたし。」(19ウ) かゝるふかき心、哥には有也。此
 哥は、橘の長盛かむすめヲ／恋て、延喜第六の御子守平親王のあそはされたり／とするす。此むすめは、天

474

一 立かへりあわれとそおもふこそ^(マ)にても人に心をおきつ白波／

人に心をおきつしら波とは、心をおきたりと云也。元方哥。／

476

一 見すもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなくけふや詠くらさん／

右近のむまの日おりの日、むかひにたてたてたりける／車の下すたれより、女のかほのほのかにみえければ、^(マ)「(21才)よむてつかわしける。なりひらか哥也。／朱云、右近の馬場のひおりの日と云は、北野の祭と云り。／おなしくは北野は菅承相^(マ)の聖廟なり。かの祭と云、／不審也。承相^(マ)は延喜の時の人也。業平は清和の時の人ぞ。／時代ことくく相違して、つふさならず。日おりとは、内侍所／の祭也。内侍所は日神也。

此祭は日不定。此御神を右近の／陣^ニくたしてまつるを、日をりと云也。むかひにたてる車の／女は、西

三条の左大臣良相の卿の御むすめ染殿の^ニ「(21ウ)内侍、是なり。後^ニ業平か妻となる、滋春か母なる。あや

／なくは、無益也。その、ち事はて、内侍方より返し哥、／

477

一 しるしらぬなにかあやなくわきていはむ思ひのみこそしるへ成けれ／

一 かすか野の雪まをわけておい出くる草のはつかにみえし君かわ／

かすかのまつりにまかれりける時、物みに出たりける／女のもとに、家を尋てつかはせりける、忠岑哥。

478

／春日の祭とは、二月の初午の日也。勅使^ニ隨身のたつ／まつりなり。女は、貫之むすめ、すけの内侍か事

なり。^(マ)「(22才)

480

一 たよりもあらぬ思ひのあやしきは心をつくるなりけり／

おほうちの御哥合にもとかたつかまつる也。／

483

一 片糸をこなたかなたに捻^{ヨリ}かけてあわすは何を玉の緒にせん／

484

一 此哥、染殿の后を思ひかけて、仁和第六王子／よみ給へる哥也。文徳天王の御舎第也。／
夕暮は雲のはたてに物そ思ふあまつ空なる人をこふとて／

雲のはたてとは、二儀あり。ひとつには、蜘蛛と云むしの幡／のやうにいとをすかくを云也。今の哥は、雲の
みたれて幡」(22ウ)をたれたるやうなり。物ををるはたものにはあらず。仏／所にかけられしはたのこと
く雲のたなひきを云。／此哥は、四条の后を恋て茲春かよめり。后は行平の／娘也。又云、雲のはたてにと
は、雲の日の入ぬる山にひか／りてすち／と立たるやうに見ゆる、雲のはたての手成ると云り。／

485

一 かりこもの哥は、貞元親王のあそはされたる也／

486

一 つれもなき人をやねたくしら露のおくとはなけきぬとは忍はん／

487

一 此哥、七条の宮哥也。仲文をおほしてあそはす。」(23オ)
ちはやふるかものやしろのゆふたすきひと日も君をかけぬ日はなし／

ゆふたすきと云は、してつけたる縄なり。かけてと云枕言也。／かけ帯のことくと云へり。春かの神主の歌。
中宮太夫良門と云也。／

488

一 我恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれとも行かたもなし／

489

一 三条右大臣良忠のむすめを恋て、紀友則か子助則か哥。／
するかなるたこの浦波た、ぬ日はあれとも君を恋ぬ日はなし／

490

一 二条の后を恋て、御兄の昭宣公のわりなくよまれし也。／
ゆふつくひさすやおかへの松のはのいつともわかぬ恋もするかな」(23ウ)

暮る日の山にかゝるやか、らざるを云也。七条の中宮の御哥。／

- 491 一 足引の山下水の木隠てたきつ心をせきそかねつる／
 染殿の内侍を恋しく思ひて、たいらの定文か哥也。／
- 492 一 よし野川いはきりとをく行水(ママ)を哥は、定文か妹の哥。／
- 493 一 瀧津瀬のなかにもよとはありてふの哥、紀貫之か哥也。／
- 494 一 山たかみ下行水の哥は、貞隆の親王、行平か娘を恋てよみ給ふ。／
- 495 一 おもひ出るときはの山のいはつ、しいはねはこそあれ恋しき物を／
- 498 一 二条の後さとおはします時、清和にみてたてまつる里とは、(24才)長良郷(ママ)の家也。東宮の女御時也。／
 わかその、梅のはつえに鶯のねになきぬへき恋もする哉／
 うめのつほみとあるもあり。末枝(ハツエ)如此し。はつえ同事也。／つほめる枝をもちへり。文集云、早心如瀧水連ナリ
- 496 一 倭代争カ／得三万世ヲ。此哥、三条の中宮の御哥也。／
 人しれす思へはくるし紅のすゑ摘花の色に出なむ／
 昭宣公忠平の御歌也。すゑつむと云は、紅のすゑをつむ也。／朱云、追て申す、常盤(495)の山の岩槐(ママ)は、或本云、
 高光の(24才)少将、九条の大臣師輔の御子にて時めきたりし、淳和の御子ニ惟仁親王ニつかへて有しか、
 御子ニ道連て世を遁／て大和多武峯ニ有時ニ、七ツに成り給娘君の許より恋／しきよし語りつかはし給ふ、
 御返事によめり。此哥は恋の／部にはいかゝ。／
- 497 一 秋の野の尾花にましりさく花の色にや恋んあふ(ママ)／
 思草也。をみなへしを云也。惟喬親王の御哥也。／
- 499 一 足引の山時鳥の哥は、七条宮を貫之恋てよむとなん。(25才)

500

一 夏なれはやとにふすふるかやり火のいつまでわか身下もえせん／

501

一 すみよしの神主津守の宣基か娘を恋て、道行の大将／のよみてつかはされし也。／
恋せしとみたらし川にせしみそき哥は、業平、二条後の／

502

一 隠てみえたまはさりしかは、恋せしと云まつりせんとて、／吉備の大明と云陰陽師をめして、賀茂の川原ニ
て／たいものまつりをしける也。されとも、弥恋しくて此哥をよむ也。／たいもの祭り(ママ)と云は、男女の中を
はなつ祭也。みそきなり。」(25ウ)

503

一 あわれてふ事たになくは何をかは哥、助内侍か哥なり。／
一 思ふにはしのふる事そまけにける色ニは出しとおもひし物を／

二条の后を恋て、業平かよめる。伊勢物語にあふにしかへは／と有か、それを貫之か書かへなをすと云。人
丸の哥ニ、わか／恋は人にはなむとおもへともあふにしかへはさもあらはあれ／此哥ニ末の句おなしき故ニ
又、色には出し思ひし物と有本も有。いかん。／

504

一 我かこひを人しるしめやしき妙の枕のみこそしらはしるらめ／

寛平の御哥合に法王の御哥也。」(26オ)

505

一 あさちふのを野、しのはら哥は、延喜三年昭宣公八幡ニ／

まいられしに、定国大将の妹見奉てよめり。／

506

一 人しれぬ思やなそとあしかきのまちかけれともあふよしのなき／

伊勢と行平も同孝光天王ニつかへしに、いせかよみて／行平の許へつかはす。あしかきのませかきは、蘆は
ほそくてなら／ふるまちかき故也。をなしことく立ならひすめともあはぬ心也。／

- 507 おもふとも恋ふともあわん物なれや 昭宣公姪メイの許に遣はす。／
- 508 いて我を人なとかめそおほ舟のゆたのたゆだに物思ふ比そ」(26ウ)
- 小野小町を恋て、平の中興かよめり。朱云、ゆたのたゆだ／とは、七種の大事あり。舟に入たる水を湯と云。湯まり／たる也。やるかたもなしと恋しき物を云也。六種別伝ニあり。／
- 509 伊勢のうみにつりするあまの哥は、忠仁公、五条の後を恋て／
よみ侍る。五条后、冬嗣の御娘順子フタゴ、仁明后、忠仁か姉也。／
- 510 いせのうみのあまの釣縄うちへて哥は、貞元親王よみて、／
もとやすの親王の御むすめ連子ツラヒコの内親王ニたてまつる。／
- 511 涙川なにななかみをたつねけん物思ふ時の我身成けり」(27オ)
陽成院の御哥也。紀淑望スモチかむすめを心かけてよみ給ふ。／
- 512 たねしあれはいはにも松はおいにける(ママ)こひをし恋はあはさらめやも／
忠仁公の御哥也。良平郷(ママ)のむすめに心かけて。／
- 513 あさな／たつ川霧の空にのみうきて思ひのある世成けり／
紀良宗か備前守にて京へのほりけるに、はりまの賀古川／にて水出たりければやすらふ程に、霧立ていつちも／みえぬに、女のむかひより渡りける。心にかけてとへは、六条の／大納言藤原の国基の御むすめと云聞て、思かけて」(27ウ)てつかわしける。良宗は、貫之か兄、紀資之か子也。／
- 514 わするる、時しなればあしたつの思ひみたれてねをのみそなく／
つねやすの親王の御哥也。日本記云、大和武尊、垂仁天王の／后を恋給ひて咄①しけるに、つれなかりければ、

- 515 唐衣日も夕暮に成る時は哥は、橘の長盛か哥也。」(28オ)
 516 宵く^レに枕さためむかたもなし哥は、延喜後の御哥。／
 517 恋しきにいのちをかふる物ならはしにはやすくそ有へかりける／
 518 伊勢か家の哥合によみ侍る、藤原良門か哥也。／
 519 一人の身もならはし物をあはすしていさ心みん恋やしぬると
 紀定文かむすめをこひて、橘の忠幹^{モト}かよめり。／
 520 しのふれはくるしき物を人しれす 大江千里かもとへ、／
 藤原長朝かむすめのよみてつかはす。也。忍び文^モしのふと也。／
 521 こむよにもはやなりなくらんめのまへ^マ哥は、昭宣公御哥也。」(28ウ)
 522 つれもなき人をこふとて哥は、陽成院の御哥なり。／
 523 行水に数かくよりもはかなき^マを哥は、二条後の／
 うちましましてあひかたかりしかは、業平のよみて／まいらする也。／
 一人を恋る心はわれにあらねはや哥は、枇杷大臣／
 御むすめをこいて、紀良宗かよみて、人つてにたて／まつり給ふ也。／
 524 一 思ひやるさかひはるかに成やする哥は、国経する／
 かの守にて久しくすみける時、北方よりよみて」(29オ) くだす哥也。 するかの夢とあり。 明法のはかせ／

いきなからに／しろき鶴と成て空に鳴渡りて、終に、后南殿にいて／給ふ御時、おりて羽のうへにのせ奉りて雲に入て失^マけり。日本武尊は、仲哀天皇の御父、景行天皇也。此心哥^マあり。／

仲原晴時かむすめ也。／

一 夢のうちにあひみんことをたのみつゝくらせるよひはねんかたもなし／

忠仁公御哥也。是は、するかへ返しをむすめかかはりて。／

一 恋しねとするわさならし烏羽玉のよるは哥、業平、／

一 宇佐の勅使くたりて、二条の後の恋しかりてつかはす。／業平のほかのみにて行あひてつかわす也。／

一 涙川枕なかるゝうきねには夢もさたかにみえずそ有ける」(29ウ)

大中臣頼基か娘を恋て、平のなかおきかよめり。／

一 恋すれは我身はかけとなりにけり哥は、大江の忠経か哥也。／

一 篝火のかけとなる身のわひしきは哥は、融大臣の歌。^(ママ)／

御娘をそつの内侍を、九条大臣師輔恋てよめる也。／或説^ニは、九条大将常行の哥となんつたへたり。／

一 おきへにもよらぬ玉もの波の上にみたれてのみや恋わたるらん^(ママ)／

伊勢か光孝^ニおもはれ奉りてあはさりし時、行平よむ也。／

一 蘆鴨のさわく入江の白波の哥は、ありつねか哥也。」(30オ)

一 人しれぬ思ひをつねにするかなる富士の山こそ我身也けれ／

壬生忠峯か、北山の伯母のありしを恋てよめる也／

一 相坂のゆふつけ鳥も我かことく哥は、四条后を／

恋て、在原の仲平かよみて遣しけり。仲平は業平か兄。／

一 飛鳥のこゑも聞えぬおく山の哥は、宇多院御哥也。／

535

536

534

533

532

530

528

527

526

525

- 548 一 逢坂の関になかる、いはし水いはて哥は、大伴清光(光清か)か哥也。／
- 538 一 浮草の上はしけれる渌なれや哥、貞国親王御娘を／
- 539 一 (マ)わひてよみ給へる。基康の親王あそはしつかわさる也。」(30ウ)
- 539 一 うち侘てよは、む声に山彦の哥は、藤原公俊か哥也。／
- 540 一 心かへする物にもかかた恋は哥は、昭宣公の哥なり。／
- 541 一 よそにして恋ふれはくるしの哥は、行平よみて、能相の娘の／
- 543 一 許へつかはしける。行平の妻と成れり。染殿内侍の母也。／
- 543 一 明たては蟬のおりはへ鳴暮し哥は、延喜の御哥合に／
- 544 一 后よませ給ひしなり。おりはへては、をりを得てと云也／とかけり。おりをえたる也。／
- 544 一 夏虫の身を徒になす事も一思ひによりて成けり」(31オ)
- 545 一 小野小町を恋て、大江ワレミチ惟章かよめり。／
- 545 一 夕されはいと、ひかたき我袖に哥は、宰相清経入道か哥也。／
- 546 一 法名蓮寂と申す。昭宣公の弟也。／
- 546 一 いつとても恋しからすはあらねとも哥は、藤原良房卿御哥也。／
- 547 一 秋の田の穂にこそ人を恋さしめ(マ)の哥は、橘の広道か、宗冬か／
- 547 一 娘を恋てよみてつかはしければ、返しもあり。ほにいて、なひ／かんとやは秋の田のかりにも人にあかれもやせむ／
- 548 一 秋の田のほのうへ照すいなつまのひかりの間にも忘れわする、」(31ウ)

549

一 人目もるわれかはあやな花薄などか穂にいて、恋すしもあらぬ^(ママ)／

朱雀院春宮の御時、望^シ親王、御娘を心かけて哥也。／文集云、苑雀^{エンシヤク}二丈之薄花^{スギ}連迷^ニ後心^ヲ云り。／文、心は、

苑雀野^ニ行テ死タル。男の妻珠か尋テ行程^{アツ}に、／苑雀か屍^{カネ}よりおいとをるす、きかまねきしより、薄／をま
ねく袖と語り。或説^ニは、苑雀^{エンシヤク}は妻、妻珠夫也。／

一 淡雪のたまれはがてに砕つ、哥は、貫之か哥なり。／

朱云、淡雪のたまれるはがてにと言は、たまれはかつくと^(32才)たけつ、と言心也。雪のたまると言は、

かつほろくと^(ママ)かすきを砕つ、と言心也。／

551

一 奥山のすかのねしのき降雪のけぬとかいはむ恋のしけきに／

すかのね雪もたまらねはと也。菅^ツの根也。染殿内侍哥也。／

古今和歌集卷第十二 相伝秘要蜜勘抄／

恋哥二／

552

一 思ひつ、ぬれはや人のみえつらむ夢知せは覺さらしを^(ママ)／

一 うた、ねに恋しき人をみてしより夢てふ物はたのみそめてき^(32ウ)／

一 いとせめて恋しき時は烏羽玉の夜の衣をかへしてそきる／

小野小町、業平にす、められて、かれ／＼に成る時よむ。けす^(ママ)／うた、ねの哥、陽成院御時、芹川の十首哥

合によむ。いとせめて／の哥、小町か哥也。夜の衣をかへすと言事は、文集云、顔女恋^ニ亡夫^ヲ返^夜。衣^ヲ待^ツ

夢契^{スナキヲ}少^一。文心は、秦の始皇の代に／清青^{セイセイ}ト云人有。女を思て有しか、他国へ行て死に、／女深歎しかは、

夫夢にみへて云ク、夜の衣を返して／北枕にねて左右の手を胸に納めよと言。女そのをし^(33才)へのこ

- 573 一 夜とともになかれてそゆく涙川の哥は、伊勢を恋て、／
- 571 一 恋しきにわひてたましゐまとひなはむなしきからの名にやのこらん／
- 568 一 しぬるいのちいきもやすると心みに玉の緒斗あはんといはなん／
聖武天皇よませ給ふ。是、光明夫人を思ふ^(ママ)り也。／
- 570 一 わりなくもねても覚ても恋しきは哥、八条の出雲／
と云おほうちにつかふまつる女也。行基か娘也。」(34オ)
- 582 一 秋なれは山とよむまてなく鹿の^き我おとらめや独ぬる夜は／
是貞親王の御息所の御哥也。不慮外忍ひ家に籠り／給ふ時、春^(こ)まてふりゆ^(こ)かんと風聞の事をかなしみて。／
- 566 ^(ママ) 一 かきくらしふる白雪の下消に哥、当家^ニは、かきくらしを／
本とする也。壬生忠岑か哥。／
- 559 ^(ママ) 一 住の江のきしによる波よるさへや夢の通路人めよくらん」(33ウ)
- 558 一 恋わひて打ぬる中に行かよふ夢のた、ちはう^(こ)つ、ならなむ／
も行死／たりし也。ことわざと言は、説法せん事也。真静法師、三井寺法師也。／
- (556) 555 一 とくするに、たかわす夢に見えし也。夫と夜毎／逢事、現のことし。是ヨリ言也。此哥、小町哥也。／
秋風の身にさむければ難^{ツレホナキ}面人をそ頼むくる、夜毎に／
素性、遍昭か家にて哥合によめる。人のわさしけると言は、死して薨ズルヲ言也。山階大将恒行の二男と

源正隆かよめる哥也。／

一 夢路にも露やをくらん終夜哥、延喜の御門の御哥也。／

一 ねに鳴てひちにしかともはるさめにぬれにし袖と問はこたへむ」(34ウ)

寛平十四年卯月_ニ厳嶋の臨時の祭の時、舞の勅使に下／しに、かの舞姫の内侍、神主兵部の大夫さいきの広
／氏かむすめを恋て、千里かよめる也。／

一 虫のこと声にたて、はなかね共涙のみこそしたになかるれ／

一 是貞親王すみよしへ御出有しに、御息所をみて／まつり給ひてよめり。昭宣公第七のむすめ。／

一 秋の野にみたれて咲る花の色の千種に物を思ふ頃哉／

一 延喜御門御子安子内親王を恋てよめる。貫之か哥也。」(35オ)

一 やよひはかりに、物た、ひける人のもとへ、又人まかりつ、／

せうそこすとき、て、つかはしける。露ならぬ心を花にを／きそめて風吹ことに物思ひそつく 躬恒か娘の

美作／のすけにあひて物いひそめし時也。又ひとりまかりつ、／消息すと聞えてと云は、清原元任かかよふ

と聞を／言也。元任は深養父か弟也。／

一 我か恋に暗部の山のさくら花まなくちるともかすはまさらし／

一 行平の娘白川娘を恋奉りて、是則かよめり。／

一 夏むし_(マ)何かいひけん心から我も思ひにもえぬへらなり」(35ウ)

左近衛佐藤原敏方、但馬守にて行あひてつれてきたりて／侍りしに、敏方かむすめほのみて恋てつかはしけ
る、躬恒／か哥也。返し、身をすて、おもふ時かはいかてかは人に心のとけさらめかも／終あひて忍ひ／

600

590

589

583

581

577 574

に契けり。／

一 津の国の難波の蘆のめもはるに哥、延喜七ノ宮を／

恋て、貫之よみて送り奉り給ひ、終に此事とけにけり。／

一 てもふれて月日へにけるしらま弓おきふしよりは(マ)いこそねられね／

をなし人の哥也。」(36オ)

一 梓弓ひけはもとすゑ我かたによるこそまされ恋の心は／

あつさ弓はあまたの義あり。一二ハ、みちのくにあつさ／の郡につくる弓也。一二ハ、あつさの木にて作也。

／一二ハ、みこの口よする弓也。まことにはあつさの木／に定るなり。／

古今和歌集卷第十三 相伝秘要蜜勘抄／

616 恋哥三 やよひのついたちよりしのひに／

人にもものらいひて、のちに雨のそほふり」(36ウ)けるに、読てつかわしける。朔日に人の物いふと／云は、

二条后、春宮の女御にて西の台にまし／ましける也。をきもせずねもせてよるをあ／かしては春のものとて

なかめくらしつ／おくへきひるはなけき、ねぬへき夜は恋し／きにねられすと也。そほふるは、雨のすこし

／ふる心也。又、そよふる也。業平(マ)よるんてつかはしける。／

一 つれ／のなかめにまさるなみた川哥、業平」(37オ)

の朝臣の家なり。女は、いもうとの初草の姫也。／敏行か妻也。あさみとり袖はひつらめ涙川身さへ(マ)／きか

はたのまん はつ草女か返したり。／

一 よるへなみ身をこそとをくへたてつれ哥は、業平(マ)既にて／

619

618 617

604

605

610

620

葛葉羅殿真雅僧正の御弟子にて十六ノ年まで／すみけるに、僧正片時も離ることなし。于時淳和天皇／召てつかはさりしに、僧正よみて給ふ哥也。よるへなみとは、／内裏なればよるへき方もなしと云心也。朱云、よるへなみとは、／縁なくてよるかたもなしと云心也。されは、後撰集云、鳴」(37ウ) 洞よしいたされし舟よりも我そよるへもなき心ちする／数ならぬ身は、うき草なりな、む。つれなき人よるへしられし。／徒に行ては来ぬる物ゆへにみまほしさにいさなはれつ、／

業平しけくかよふとて、後のあに昭宣公の許へかくし奉りて／ありしに、あはぬ物ゆへに行てはかへり又かへりて行／くを、二条の後の許へ忍て奉るける哥そ。／

621

一 あはぬ夜のふる白雪とつもりなは我さへ友にけぬへきものを／

文武天皇の后を犯て、上総国へなかされしける、人丸か哥也。／

622

一 秋の野に篠わけしあさの袖よりもあわてこし夜そひちまさりける」(38オ)

あさの袖は、朝の袖也。大和物語の事を引てよめる也。桜／田の利名の中将、河内国なる女にかよへとも、あはて／朝の袖のみ滋てかへりし事を思ひ出て、よみ侍る也。業平。／

625

一 晨明のつれなくみえし別より暁斗うき物はなし／

忠峯いまた延喜の御門にもつかへすして、和泉大将貞国／の許ありし比、貞国、暁の恋と言心をよめと言て／帰りぬ。忠峯よみ侍りける。此哥は名哥なる故に、／やかて和哥所ノ衆とせり。住吉明神の利性也。」

(38ウ)

626

逢ことこのなきさにしよる浪なれば哥は、元方津の守成て／

東国の時西の宮にて参りあひたりし女を恋て、又行ゑ／をたつぬれば、左大臣源常行卿の御娘と聞て、よみ

- 644 一 ねぬる夜の夢をはかなみまゝとろめはいやはかなにも成まざる哉／
- 642 一 玉匣(前の誤か)あけなは君か名たちぬへみよふかくこしを／
人みけんかも 延喜の東宮にてよませ給ふ哥也。／
- 641 一 郭公夢かうつゝ、か朝露のおきてわかれしあかつきのこえ／
仁明天皇の大嘗会に業平既にて物みけるを恋て／けるか、東寺の辺にて一度あひ侍りける。暁に郭公／なく
を聞てよめる。醍醐法し定海の哥なり。真如／親王の御子也。業平かいとこなり。」(40才)
- 638 一 あけぬとていまはの心つくからになといひしらぬ思ひそふらん／
二条の后ニしのひてまいりし時、暁よめる。としゆき。／
- 633 632 一(マ) 人しれぬ我かよひちの関守は宵／くことに打もねなゝん／
しのふれと恋しき時は足引の山より月のいてゝこそくれ」(39ウ)
中納言藤原の利基か娘を一夜めしてかへらむとしけるに、／文徳天皇あそはしけるとなん。／
- 627 一 かねてより風に先たつ浪なれやあふ事なきにまたきたつらん／
大友の家持かむすめ、ならひなき美人也。文武おほし召／けるを、柿本躬都良恋て通ふと名を立て、／石見
の国へなかされける時、よみて王に奉りける／哥也。ひんかしの五条あたりに人をしりてと言は、／ひかし
の五条は長良中納言の家也。かれに二条の後の／おはしけるに、業平忍／くにかよふと聞へける也。／

人にあひて朝につかはすと言は、小野小町にはしめて／相し也。業平□三年也。都北山にて也。／業平伊勢の国^(マ)まかりたりける時、青宮^(マ)なりける人ニ／いとみそかにあひて、又のあしたにひとやるすへなくて／おもひをりける。に、女の許よりおこしたりける哥。／是はかりの使と言也。太神宮にたか狩をして神供に^(マ)／みなる御使也。斎宮成ける人と言事は、清和天皇の」(40ウ) 妹、吕子内親也。斎宮の哥也。／

一 君やこし我やゆきけむおもほえず夢か現かねてかさめてか／
返し 業平／

645 一 かきくらす心のやみにまとひにき夢うつゝとは世人さためよ／
646 一 烏羽玉の闇の現はさたかなる夢にいくらもまさらさりけり／

647 一 ありつねかむすめを恋て、貞元親王のよみ給へり。／
648 一 さよふけてあまのと渡る月影にあかすも君をあひみつる哉／

649 一 朱雀院の御哥也。仙洞にやき子と言女を心にかけて給／て
一 君か名も我名もたゝし難波なるみつともいふなあひみともいはし^(マ)／

650 一 天智天皇の近江の采女と妻たひける哥也。」(41オ)
一 名とり河瀬々のむもれ木あらはれていかにせんとかあひみそめけん／

651 一 染殿の后を恋て、ある事によりて東国へなかされて、金／青鬼と成て取奉る程に、后うせ給へる／
一 吉野川水の心はやくとも瀧のをとにはたてしと思ふ／

652 一 二条の後の御哥也。／
一 恋しくは下におもへ紫のねすりの衣色にいつな夢／

- 671 一 順子を恋て、紀淑望かよめり。／
- 669 一 花す、きほにいて、恋は名をおしみ下結ひものむすほ、れつ、」(41ウ)
- 664 一 四条の后を恋て読けるなり。女の許よりおこせたりけると／は、たいらの中興かむすめ也。／
- 660 一 現にはさもこそあらめの哥、業平、小町を恋て読る。／
- 659 一 限なき思ひのま、によるもこむ夢路をさへに人はとかめし／
- 658 一 夢路には足もやすますかよへともうつ、に一日^(マ)みしことはあらず／
- 657 一 大江の惟章か許へつかはしける、小町か哥也。／
- 656 一 思へとも人めつ、みのたかければ川と見なからえこそ渡らね／
- 655 一 藤原の忠房か哥也。／
- 654 一 瀧津瀬のはやき心をなにしかもひとめつ、みの関と、むらん／
- 653 一 北野へまうてつる時、物見車のと、ろくをみれば、女車也。」(42オ) 河原^ニ侍りみるに七条の后也。やかて
- 652 一 恋て、貫之つかはす哥也。／
- 651 一 山しなのをとほの山の音にたに哥は、近江の采女の／
- 650 一 天智天皇を恋たてまつりてよみて奉る哥也。／
- 649 一 大かたは我名もみなときいてなむ世を海へたにみるめすくなし／
- 648 一 平城の御孫源の融の御むすめをおもはせ給ひて哥。／
- 647 一 風ふけは波うつきの松なれやねにあらはれてなきぬへら也／
- 646 一 さたけの直我と染殿内侍を恋奉りて、よめるなり。／

676 (マ)

しるといへは枕たにせてねし物をちりならぬ名の空にたへなん

伊勢、一夜忠房ちきりて、やかてかくれなし。／伊勢かよむ。」(42ウ)

古今和謠集卷第十四 相伝秘要蜜勘抄／

恋哥四 よみ人しらす／

677 一 陸奥の浅香の沼の花かつみかつみつる人に恋や渡らん／

在原の業平かむすめを恋て、しのひくにあふてよめり。／在原の基平か哥。行平の一男也。／

678 一 あひみすは恋しきこともなからましをとには人をきくへかりける／

すけの内侍にあひてみつねか哥也。／

682 一 石間行水の白波立かへり哥は、業平を恋て、二条の／

后よみて送り給ふ哥也。」(43オ)

683 一 伊勢の海士の朝な夕なにかつくてふ哥は、宇多の／

御哥也。／

688 一 思ふてふことの葉のみや秋をへて色もかはらぬ物にそ有ける／

是貞の親王の御哥也。／

692 一 月夜よし夜よしと人につけやはこてふににたりまたすしもあらず／

すけの内侍の許へ常康親王のこむとて来さりければ、／よみて恨みやりけり。／

696 一 津の国の難波おもはす山城のとはにあひみんことをのみこそ／

すけの内侍か哥也。」(43ウ)

- 697 敷嶋の大和にはあらぬから衣比もへすしてあふよしも哉／
 とうい・なんばん・せいしう・ほくてき、四人の將軍、よつの城を／かまへて有り。故に、四城嶋と言也。
- 701 699 城と言字をきとよむ。／此哥は、七ノ宮を恋て貫之かよむ也。／
 一 みよし野、おほかはのへの藤波のなみにおもは、我恋めやは／
 一 あまの原ふもと、ろかしなる神も思ふ中をはさけしとそおもふ／
 一 さくるは、さまたくる心也。紀乳母の哥也。陽成院／の御乳母也。／
- 702 一 梓弓ひきの、つゝらすゑつゐに我思ふ人にことのしけけん」(44オ)
 一 しけ、むは、相ことのしけるれ也。基房の哥也。／
- 703 一 夏引の手引の糸をくり返しことしけくともたえんとおもふな／
 一 あめの御門と言は、天智天皇御事也。あふみの采女ニたふ哥也。／采女は、終に御門を恨て、猿沢の池の玉藻とよめり。／かの池に身を投て死しには、ねくたれかみ玉藻となれり／と言。朱言、梓弓（702）の哥にことのしけ、むとは、諍論口／舌をいひならはしたり。引野の名所つゝらも、さて／引野のつゝらと言と也。たかま（マ）の野へにはふくすの／すゑ終に千世の返にわすれん我大君もすゑ終には、」(44ウ) 後つゐ也。／
- 706 一 おほぬさの引手あまたになりぬれと言哥、二条后御哥也。／
 一 業平のひとかたならぬを恨みよませ給へる也。帛也。／
- 707 一 おほぬさとなにこそたてれなかれてもつゐによるせは有てふ物を／
 一 業平御返しを申たりき。／
- 708 一 すまのあまの塩やく煙風をいたみおもはぬかたに柵引にけり／

709

清和の御むすめに選子内親王と申し人なり。されは、清和の／籠居を訪奉るやうにて、申初て、しのひ／
にかよひ／けるか、此人、さかの天皇の御子基陰親王モトカケつれて須磨に／住給ひしに、本よりなりひらの許へつ
かわす哥也。煙とは」(45才) 恋を言、風とは夫を言也。もとかけ風をいたみておもはぬ／方のすまにすみ
たる事よせは、かくうつふしなる事かなと読り。／

一

玉かつらはふ木あまたに成ぬれば絶ぬ心のうれしけもなし／

一(?)かたならぬかよふ人のあれは、常に問た(マ)ことの葉も嬉／しけになしとよめり。此は、伊勢光孝親王の行

平／等のかよふとき、て、うらみてよめる也。橘の長盛／か哥也。伊勢(マ)か物の夫にてありしかは、かくよみ
／て待りけり。／

710

一

誰里によかれをしてか時鳥たゝこゝにしもねたる声する／

染殿の内侍か重明親王に相てかへり、こよひはいかなる／人に逢たりけるそと、(マ)歸りて夫言ければ、平の
定平」(45才) かねなからによめる哥也。定文は内侍か夫也。／

712

一

偽のなき世なりせはいかはかり人のことの葉哥は、延喜／

の御哥也。／

720

一

たえす行飛鳥の川のとみなは心ありとや人のおもはん／

おほなかとみの棟(マ)に人の名のりの哥也。／

721

一

淀川のとむと人はみるらめと哥は、惟喬親王御哥也。／

はつ草の女房を恋てよみ給ふ也。／

723

一

くれないのはつ染(マ)の色ふかく思ひし心われ忘れめや／

- 725 一 おもふよりいかにせよとか秋風きふになひく浅茅せんそうの色ことになる」(46才)／
- 730 一 多マ出子マをなりひら恋てよませ給ふ哥。／
- 731 一 めつらしき人をみるとやしるもせぬ哥は、業平の哥。／
- 732 一 かけろふのそれかあらぬかの哥は、貞平親王の御哥也。／
- 733 一 ほり江のたな、し小舟は、行平かむすめの哥也。／
- 734 (736) 一 わたつみとあれにしとこをいまさらに哥は、伊勢、七条の／
- 739 一 中宮にをくれまいらせて、出家して如法房と／言て桂の里にすみし時、延喜の御時題を贈給ふ哥也。／又、
- 742 一 むかしへと言事は、むかしにたちかへると言心也。」(46ウ) 右のまうち君とは、大夫也。近院の右大臣源
- 740 一 能有の／御事也。内侍の夫也。因ヨルカ香也。／
- 744 一 まてといは、ねてもゆかなむ忍ママひ行駒のあしおれまへのたなはし／
- 742 一 大江の玉溺かむすめのよめる哥也。たな橋は板打渡す也。／
- 740 一 あふ坂の夕付鳥にあらはこそ君行きをなく／もみめ／
- 742 一 のほるは、とほるの大臣の子也。閑院と言は、かの妻也。／顕景の大將のむすめなり。／
- 744 一 山賤のかきほにはへる青つ、ら人はくれともことつてもなし」(47才)／
- 742 一 かきのおもてなり。寵はうつくしとなんよむ／流もあり。当流にはた、ちようとよむへき也。／
- 744 一 あふまての形見も我はなにせんとみても心のなくさまなくに／
- 744 一 おやのまもりける人とは、平の定文かむすめ也。／関白貞信公御子とみの小路右大臣顕忠卿を／聳にとらん

745

一 とて、こと振舞をせさせしとするを言也。□れ／ともなりひらか哥。／
あふまての形見とてこそと、めけめ涙にうかふもくつ成けり」(47ウ)

興風かよみて送りけり。返し。／

746

一 形見こそいまはあたなれはなくはわする、時もあらまし物を／

二条后、なりひらのもとへよみてつかはし給ふ也。／されは、なかされし時、てなれたるくろ木の／す、を
后へ奉りて、我^(ママ)ともなりなは後世とふらひて／と言心をおしはかりて、后はあけ暮の涙なり。」(48オ)

(本学教授)

(本学研修者)